

2011年 11月19日・毎日新聞「北の書棚」欄では

「日本のランボー」と呼ばれた詩人、逸見猶吉^{へん み ゆうきち}の生涯や時代背景、足跡をたどり、暗喩などのレトリックに満ちた詩編の意味を解き明かす研究評論。

逸見は、わずか40編ほどの詩を残して終戦の翌年、旧満州（現中国東北部）で、肺結核と栄養失調のため38歳の若さで没した。

岩手町出身の著者は、東京で編集関係の仕事続ける一方、脚本や独自の詩論を展開。逸見の詩作の原点となった北海道放浪の痕跡を丹念に取材するなど、昭和前期の詩壇に大きな衝撃を与えた詩人の内面と深層に迫る。

半世紀前から逸見研究を始めた著者は、04年に「逸見猶吉 ウルトラマリンの世界」、06年に「逸見猶吉 火檻樓篇^{ひぼろ}」を刊行。この2著に新たな解説や批評研究を補遺し、逸見猶吉研究の決定版として本編を上梓^{じょうし}した。

と紹介されています。